

福岡学生演劇祭講評

高野桂子

総評 誰が客席に座っていて欲しい？

自分たちの胸のうちを吐露する作品が多かったように思う。それでも演劇作品として成立しているし、普段は観ることが出来ない皆さんの胸の内に秘められたものに触れることができ、9本とも刺激的で楽しむことが出来た。

しかし一方で自分の気持ちを表現することに留まると独りよがり、自己中心的な表現にもなってしまい兼ねない。自分の気持ちを吐き出すだけならネット上でもできる。

演劇で、生身の人間がやるからこそ面白いものがあるのではないかな？

そこでぜひ、“客席に座っていて欲しい人”を想像して欲しい。つまり、自分たちの作品を誰に届けたいか？ということである。私も自分の想いを作品に投影することは多いが、執筆中も演出の際も、観客のことを想像する。

人生で初めて演劇を観る人／朝から晩まで働いて19時の公演に来てくれた人／親に連れてこられた小学生／あの時私をいじめたやつ等々。

大雑把に多くの人に観てほしい！幅広い年齢に楽しんでもらう！と思っけていても、宛名のない手紙のように、表現がなかなか定まらない時がある。だから敢えて誰に見せたいかを具体的に想像すると、客観的な視点が芽生え独りよがりな表現を回避することができる。

「誰に見せたいか」という問いは、「なぜ創るか」にも繋がる。最初からそれが分かっけていなくて良いから、創作中、問い続けてほしい。そうすれば、自ずとやるべきことが見えてくるはずだ。

もちろん、観客なんて関係なく、とにかくやりたいことをやるだけ！というスタンスを否定するわけではない。むしろとても良い心意気だと思う。ぜひやり抜いてほしい。自分達がやりたい事とはなんなのか、今やっけていることは本当にやりたい事なのか、一切の中途半端を許さず極めたものが、観てみたい。

まいにゅーぎあ「いつかの電話」

電話でつながる姉と妹。「家」の内側と外側からの視線が交差する様に惹かれた。

家を出て進学した姉は、段ボールから湧き上がる家の匂いを懐かしむ。一方家で両親と同居する妹は家の息苦しさに窓を開け外の空気を吸う。自分の人生を歩む姉と両親のために家に留まることを考える妹の対比が鮮やか。

同じ家で過ごしていた二人が離れ離れになり、価値観も変化していく。しかし違う立場から言葉を交わすことで、お互いの気持ちを慮ることはできる。何気ない会話が、救いになる時がある。そう思わせてくれる作品だった。登場人物と同世代の学生たちには共感できる部分が多かったのではないだろうか。

さて、この作品の重点は二人の会話にあり、それを純度高く届けるための演出を企てる必要がある。それは、相手の言葉の受け取り方一つ一つを吟味することでもあるし、小道具の取捨選択でもある。小道具で言うと、無対象の演技（マイム）で表現される部分と、小道具を使用している部分があった。実家から段ボールが届くシーンで、段ボールは実際のものを使い、中身の駄菓子はいみじくもマイムであった。駄菓子は家や母の繋がりの象徴、後に「宝箱」と呼ばれるものであるが故に、箱を開いてマイムに切り替えられた瞬間、急に現実に戻された気分になった。些細なことのように見えるが、そういった積み重ねが作品を形作っている。今後さらに拘り抜いた作品作りに期待したい。

闘う！あらいぐま「あまやどり」

ある日突然、部屋が海に囲まれている。SF 的な話か？と思っていたら、なぜか日常会話が繰り返される。それくらい、繰り返されてきた日常の強度を写し出していたのだろうか。

母と娘の関係は時に密室的で当事者同士じゃないと分からない関係なのということ、島で孤立しているような 2 人の様子からつくづく思わされた。きっと娘の態度も観客からは反抗的な態度のようにみえるけど、母からみれば愛くるしく思えるのかもしれない。そういった二人の間に流れている二人にしか分からない感情、関係を想像する余白がある作品だった。

外では雨が降っているのに雨の音が聞こえないというシチュエーションも詩的で、引き込まれた。外の世界では雨のように止めどなく様々なことが起こっているが、二人にはどこか他人事で実感がなく、その音が聞こえずただ眺めている。あまりに実感がないので、雨の音を再現する。二人だけに聞こえる音。自分たちがここにいるということを実証する音。そして自然に観客が参加していくことで、二人の世界が客席までふわっと広がっていったのは、劇的な瞬間だった。

上記のように解釈が広がる作品ではあるが、部屋の中にいる二人の世界同様、作品自体が閉じこもっている印象も受けた。オープニング、エンディングに登場する男女の存在や、不条理な展開について観客に委ねている部分が多く、観ていて戸惑う場面もあった。シチュエーションの面白さを活かして、観客を置いて行かず、もっと遠くへ連れて行って欲しいと思った。

でいどり。「爆弾は見ない」

衣装や美術から世界感へのこだわりを感じた。白い布は蜘蛛の巣か、それに散らばる新聞紙はあふれる情報や外野からの雑音。蛾は、蜘蛛の巣に囚われ羽ばたくのをやめた。「わたし」は学校では平気な顔をしているが、静かな絶望感がじわじわと迫ってくる。

中央に置いてある爆弾は孤独の象徴のように感じた。寂しい時、精神的に満たされない時、ネットや SNS の世界に何かを求める人は多いのではないだろうか。爆弾（孤独）自体は直視せず、そこから抜けだけ出そうとして爆弾から引き出される雑音で逆に精神がすり減っていく様子は、現代人にとって「あるある」の風景を痛々しく現していた。

作品は大きく分けて、現実世界の友達との会話シーンと SNS 上のシーンがあった。舞台美術と衣装が抽象世界を表現しているため、2つのシーンの棲み分けが曖昧な部分があった。学校のシーンで机と椅子を使うなどして、あえて現実世界をグッとリアルにすると、その他の内面的なシーンが際立つのではないか。

友達や SNS の反応が全て、という蜘蛛の巣のような狭く生き苦しい世界で生きている学生は少なからずいるだろう。しかしながら世界は少しずつ広げていくことができる。ラスト、蜘蛛に捕食されてしまったように見えたが、どうにか生きながらえ、大きな世界に羽ばたいて行ってほしいと思わず願ってしまった。

エンタメユニット爆笑サンライズ「あめ」

バス停の美術、電柱のライトが山中の淋しい空気感を醸し出していた。

家出をする前は、親への不信感、どこに向けて良いかわからない苛立ちを抱えていた男は、最後に「モヤモヤが晴れた」と晴れやかな表情を見せた。その変化の過程が描かれた作品だったように思う。

風雨の中、男は濡れないように体を固めていたが「こんなのじゃ、ここに来る前と変わらない」と気づく。その後、雨の音が弱まって、水溜りの上で踊るまでに心が解放されるのだが、一体この間に何が起こったのか。雨が弱まったから、安心したのか。寒さから命の危険を感じ、そこで初めて生きている実感を覚え、自分が抱える問題が小さく感じたのか。とにかく、肝心な部分（ドラマ）がぼかされていて明確に受け取ることが出来なかった。起承転結で例えると、「転」の部分を濁してしまっている状態だった。

あえて観客に委ねていたのかもしれないが、この作品においては、男の心情の変化を観客は追っているのです、そこをぼかしてしまうと観客にモヤモヤが残ってしまう。

美術や情景の描写によって男の心情が表れているシーンは美しく伝わってきたので、作品の核心部分と向き合い、俳優の身体性にもこだわりを持って作り込むと物語の説得力が増すと思う。

ギムレットには早すぎる「らびっど・ふらっと・ぷらっとふーむ」

俳優のどっしりとした存在感や、登場人物同士の噛み合わなさが絶妙で、観客も審査員も納得の大賞作品。もうこの団体は「学生」の枠組みから抜け出し、劇団として活動をステップアップさせて欲しい。そう思わせる貫禄があった。

さて、この戯曲は原作があり、それを潤色する形で構成されている。原作は芸人の道とサラリーマンの道の間で揺れる青年を軸に描かれていて、潤色は登場人物の背景を膨らませ、遊び心が散りばめられていた。上演においても、主人公の展開されるのかと思って観ていたが、最終的には真面目にふざける男たちを楽しむ時間になっていた。

団体の中に作家が複数いて、共作できることは強みでもあるが、そうならない場合もある。

今回は、原作の方向性と潤色の方向に相違があり、それが溶けあわないままになっていたように感じた。せっかく同じ劇団内に原作者がいるので、元の物語を活かし、二人の持ち味を掛け合わせたものを作り上げることも可能なのではないか。

もしくは元の物語の設定のみを採用し、その枠組みの中で遊び尽くす方に舵を切るか。頼もしい俳優陣がいるからこそ、振り切った作品にチャレンジする価値があると思う。

劇団焚火「いけないらしい」

落語のようなオープニングで一人二役やっているように見えたが、台本では「男」と「オトコ」という表記があり、これは自分自身と対話しているように受け取った。

男と、その内面を見つめるもう一人のオトコの対話。社会に順応しサラリーマンとして過ごしているが、ふとした瞬間に心の奥底に押し込めていた自分の暴力性が溢れ出す様にはゾっとした。

小さな子供が積み木遊びなどで、作っては壊すことを楽しむことがあるが、それは自分がやったことに対して、すぐに反応があることを楽しんでいるのだ。積み木を倒す、がしゃんと音がして倒れるという反応がある。人を殴れば血が出る。破壊や暴力はすぐに反応を得られ、安易に自分の存在を確かめることができる。

しかし、サラリーマンとして社会の歯車の一つになった時、自分が担っている仕事から目に見える結果や反応が見えにくいのかもしれない。そういったフラストレーションから、抑え込んでいた破壊欲求が溢れてきたのではないかと感じた。つまり、社会に順応しているようでしきれていない、大人になったようでありきれていない男の、成長痛の叫びのような作品であった。

キャラクターの切り替えが鮮やかで俳優の技術の高さが伺えたが、回想シーンの状況説明、いけないことをしている時の異様な高揚感を、ほぼ言葉のみ説明してしまっ

いたので、身体的な表現も模索するとより真に迫ったものになるのではないかと思う。身体一つで人間を描き出すのが一人芝居の醍醐味であり、戯曲で完結するにはもったいなく感じた。

よんもじオノマトペ「超不自然」

ひとり暮らしの大学生の部屋で繰り広げられる青春ドラマ。

部屋も人生も、放っておけばどんどん複雑になっていく。それが自然界の法則であり、整然とした部屋、はっきりと名前のつく人間関係は不自然な事象というメッセージが、甘酸っぱい恋模様と共に展開されていく。登場人物たちのキャラクターも際立っており、登場しないメグミの人物像も垣間見えるなど、脚本の作りが素晴らしかった。

その反面、演技に腑に落ちない点があった。大学生同士の会話にしては、一つ一つのセリフを丁寧に言い過ぎていて、リアリティに欠けている。呼吸も一定なため、感情の起伏が読み取りづらい部分もあった。セリフはその全てを明瞭に発声する必要はなく、セリフを読み取った上で時には吐き捨ててもつぶやいても良い。自分たちの普段

の会話がどのように行われているか客観的に研究してみるのも、会話劇の参考になると思う。

恋の終わりとともに、自然体で居ることが許されたモラトリアム期間も終了し、彼らは自然の摂理に反する人間社会に取り込まれていくのかもしれない。しかし、社会人14年目の私としては、社会のシステムもかなり曖昧な部分があり、白黒はっきりした人間関係もほとんどないので、不自然に力む必要はなく、自然体なままで居てほしいという感想を持った。

たつ鳥濁した痕始末「ボディ」

ショッキングな冒頭のシーンから引き込まれた。

身体を失ってしまった少女の視点から、死後、生前のシーンが展開される。

大切な人を失った時に、魂はまだそこら辺にいるんじゃないか、どうか側で見守っていて欲しいと願ったことがある人は、多いのではないだろうか。今作はそんな誰もが願う設定になっていて心が惹かれた。また、死化粧でテンションが上がる少女と泣き崩れる両親といった、魂と取り残された人々のコントラストが映えるシーンが印象的だった。案外、死んでしまった側はそういうものなのかもしれない。

布と身体一つで物語を展開させることの思い切りの良さに感服するが、もう一步俳優の想像力、身体性を活かしたのではないかと思う。美術や小道具に頼れない分、そのシーンが過去なのか、現在なのか、その場に誰がいるのか、不明瞭な部分があった。観客は俳優の身体（表情、向き、目線、声のトーン、間合い、声色等々）からその世界観を理解する。従って俳優は各シーンで、道がどう繋がっていて人々の往来はどうなっているのか、ドアの形状や部屋の構図など台本に描かれてない部分も含めて可能な限り詳細に想像しなければ、観客にその情報は伝わらない。それが伝わらないと、このシーンはいつの話？今のセリフは誰に言ったの？と疑問を持ちながら観続けることになるため、非常にもったいない。

一人芝居は俳優人生において大きな経験値になるので、これを活かした次の取り組みに期待したい。

劇団テスカトル「ミラクルダークホース」

事業に失敗した主人公が見知らぬ路地に入り込み、路上パフォーマンスを行うマジシャン、それを見ているホームレスと出会う。そこへシンガーや金持ち、ひねくれた大

学生などがやってきくる話だが、不条理劇と形容しても良いような、会話の噛み合
なさやツッコミどころの多いキャラクター造形に釘付けになった。

この異様さは稽古不足でたまたま生まれてしまったものなのか、敢えてこの空気を作
っているのか分らないが、とにかくあのミラクルな空気感を観客が楽しんでいたこ
とは間違いない。人は不完全なものに惹かれる時がある。チープなようで人間味溢れ
るこの路線を突き進んで欲しい。

脚本上では「主人公」「マジシャン」「ホームレス」というように登場人物が匿名な
ため、ネット上でのやりとりのようにも見えた。特に、マジシャンやシンガー、金持
ちといった目立つ人へ必要以上に向けられる容赦ない言葉たちは、ネット上の誹謗中
傷そのものだった。そして、それを生身の人間が発話することにただならぬ違和感を
覚えた。人は現実世界だと、通りがかりの人に向かって暴言を吐くことは殆どない
が、匿名になると凶暴性が増す弱い存在だということを逆説的に表していた。